

【短報】ネアカヒメフトコメツキダマシの雌の形態

ネアカヒメフトコメツキダマシ *Bioxyllus natsumiae* Watanabe, 2009 は、上翅基部が赤みを帯びる特徴のある種である。岡山県で発見されて以降、群馬県、長崎県、鹿児島県から点々と記録がなされているが（今坂・阿比留, 2012; 鈴木, 2016）、これまで本種の雌の形態についての報告はなかった。筆者は、宮崎県で採集された雌個体を検することのできたので、雌雄の形態的な違いについて明らかにしておきたい。

検視標本：1♀ (Figs. 1 & 3), 宮崎県宮崎市田野町甲朝陣野, 22. VII. 2016, 笹岡康則採集 (FIT).

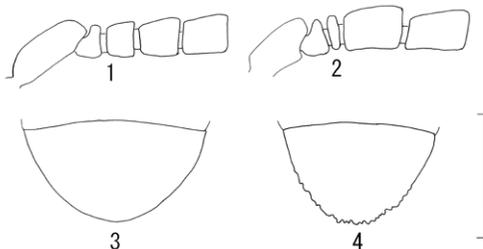
比較標本：1♂ (Figs. 2 & 4), 鹿児島県肝属郡南大隅町杉山谷, 16-17, VIII. 2014, 野田亮採集 (FIT).

体形や色彩は雌雄ほぼ同様であるが、触角および腹部末端節の形状において違いが認められた。触角は雄では第3節が第2節より明らかに短く、これら2節を併せた長さは第4節より明らかに短い（Fig. 2）、雌では第3節が第2節より明らかに大きく、これら2節を併せた長さは第4節とほぼ同長（Fig. 1）となる。腹部末端節は、雄では不揃いな鋸歯状になるが（Fig. 4）、雌ではほぼ一様に弧状となる（Fig. 3）。

分布：本州（群馬県、岡山県）、九州（長崎県、宮崎県、鹿児島県）。

備考。筆者は、先の報告（鈴木, 2016）において、本種は原記載後の記録はないとして、群馬県と鹿児島県から記録をしたが、今坂・阿比留（2012）により、長崎市彦山から既に記録がされていることが明らかになった。ここに、お詫びして訂正しておきたい。

末筆ながら、貴重な種を検査する機会を与えてくださった宮崎市の笹岡康則氏と久留米市の野田亮氏、長崎県における本種の記録の存在についてご指摘くださった、久留米市の今坂正一氏に厚くお礼申し上げる。



Figs. 1-4. *Bioxyllus natsumiae* Watanabe, 2009, ♀ (1 & 2), ♂ (3 & 4). 1-2, basal five segments of right antenna; 3-4, 5th visible abdominal sternite, ventral view. Scale: 0.5 mm for Figs. 1 & 2; 0.8 mm for Figs. 3 & 4.

引用文献

- 今坂正一・阿比留巨人, 2016. 長崎市彦山とその周辺の甲虫類 (2011) -彦山虫採り散歩(2)で得られた甲虫の2010年度との比較-。こがねむし, (78): 9-25.
鈴木 互, 2016. 関東および九州におけるネアカヒメフトコメツキダマシの記録. さやばねニューシリーズ, (21): 40.
Watanabe, A., 2009. A new false click beetle species (Coleoptera: Eucnemidae: Melasinae) from Okayama Prefecture, west Japan. The Entomological Review of Japan, 64(2): 135-138.

(鈴木 互 211-0031 川崎市中原区木月大町 6-1 法政大学第二高等学校生物科)

【短報】ヨツボシヒメゾウムシの新分布地

ヒメゾウムシ亜科ヨツボシヒメゾウムシ *Dendrobaris flavosignata* (Roelofs) は稀な種で、分布は本州、九州、筑前沖島、対馬、台湾となっているが（吉原, 2016）、筆者は屋久島産の個体を持っているので新分布として報告する。

1ex. (図 1, 2), 鹿児島県屋久島中間 - 栗生林道, 11. V. 2007, 向山敬延採集。

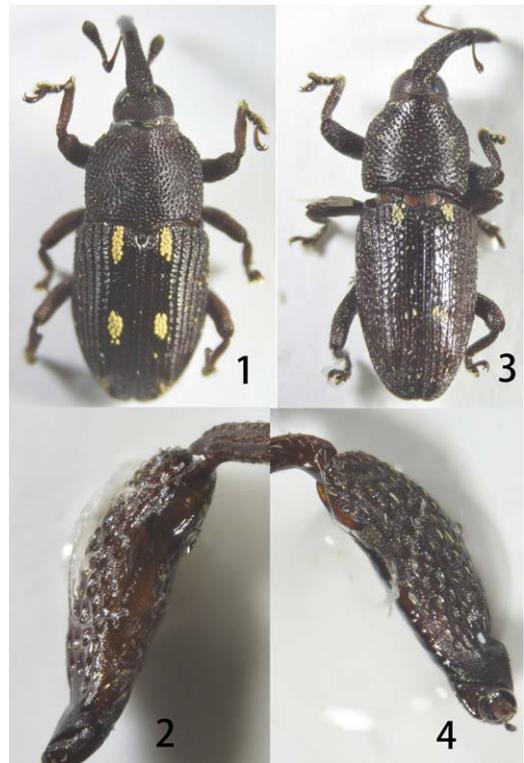


図1-4. ヨツボシヒメゾウムシ (1, 2) およびヨツボシハナコブヒメゾウムシ (3, 4). 1, 3, 全形図; 2, 4, 前腿節.

また、屋久島にはヨツボシハナコブヒメゾウムシ *Dendrobaris insularis* (Morimoto et Miyakawa) も産し、この種は体長、斑紋の個体変異が大きく、ヨツボシヒメゾウムシと紛らわしいが、前腿節の基部がくびれることにより区別される。参考までに本種のデータと写真(図2,4)を添えておく。

1ex., 鹿児島県屋久島栗生, 12. V. 2003, 向山敬延 採集。

貴重な標本を提供して下さった向山敬延氏, ご教示頂き報文を校閲していただいた吉原一美博士にお礼を申し上げます。

引用文献

吉原一美, 2016. 日本の昆虫 Vol. 6. ゾウムシ科, ヒメゾウムシ亜科. 171pp., 権歌書房.

(田中 稔 663-8002 西宮市一里山町 19-18)

【短報】沖縄島におけるミカンカメノコハムシの最近の記録

ミカンカメノコハムシ *Cassida obtusata* Boheman (別名タイナンジンガサハムシ; 木元・滝沢, 1994; 木元, 1995) は、体長 4 mm 程度のハムシで、台湾、中国南部、インドシナ、ミャンマー、インド、フィリピンに分布する(東, 1992; 木元・滝沢, 1994)。日本では 1987 年に沖縄島の石川市(現、うるま市)のウンシュウミカン *Citrus unshiu* Marcov. で初めて発生が確認された。本種は、台湾など南方からの外来種とされている(東, 1992; 小濱・嵩原, 2002)。幼虫はイヌビユ *Amaranthus lividus* Loisel. などヒユ科植物の葉を食し、成虫が

後食としてミカンの葉裏を摂食する(東, 1992)。発見当時はミカンの害虫として注目され、分布や生態、生活史について調査された(東, 1992)。しかし、重要な害虫ではなかったため、その後の本種の生息状況についての情報はなく、最近、大貝(2016)が沖縄県の南大東島から記録しているくらいである。筆者は 2016 年と 2017 年に沖縄島で本種を採集しているので、最近の沖縄島における記録として報告する。

5exs. 10. IV. 2016, 沖縄県本部町山里; 2exs. 14. IV. 2017, 沖縄県宜野湾市佐真下。いずれも筆者採集である。これらの標本は琉球大学博物館(風樹館)に収蔵されている。

採集された成虫は、ノゲイトウ *Celosia argentea* L. (ヒユ科)で見つかった(図1)。今回の観察で幼虫は見られなかったので、ノゲイトウの葉の食痕(図2)、葉表を円形に齧りとる、あるいは穴をあける、は成虫によるものと判断された。成虫も幼虫と同様にノゲイトウなどヒユ科の葉を摂食するようである。

末文ながら、ノゲイトウを同定いただいた比嘉正一氏にお礼申し上げます。

引用文献

東 清二, 1992. 沖縄で発見された昆虫類. 昆虫と自然, 27(5): 28-30.

大貝秀雄, 2016. 南大東島で採集されたミカンカメノコハムシ, チュウジョウテントウおよびその他の昆虫. 月刊むし, (550): 29-30.

小濱継雄・嵩原建二, 2002. 沖縄県の外来昆虫. 沖縄県立博物館紀要, (28): 55-92.

木元新作, 1995. 澎湖島のハムシ. 月刊むし, (298): 17.

木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会.

(小濱継雄 〒901-2216 宜野湾市佐真下 28)



図1. ノゲイトウ葉上のミカンカメノコハムシ (2016年4月10日本部町)。



図2. ノゲイトウにみられた本種による食痕 (2016年4月10日本部町)。